

次の文を読んで1～3の問いに答えよ。

Aさん(26歳、女性)は、市役所の市民課で働いている。結婚2年目。月経周期は28～35日で、期間は5日間。月経困難症により、市販の痛み止めを使用していた。身長158cm、非妊時体重53kg。最終月経から30日後、嘔気が強く、食事も摂れなくなってきたが、日々の残業に加え、休日出勤もあり、繁忙期の仕事が落ち着いたら改善するだろうと様子を見ていた。その後も症状の改善はみられず、嘔気・嘔吐、体重減少もみられたため、かかりつけ医を受診し、産婦人科を紹介された。産婦人科受診時の体重は51.1kg、尿検査にてHCG150,000IU/mL、尿蛋白(-)、尿糖(-)、ケトン体(-)、経膈超音波検査にて心拍動が認められた。

1 Aさんへの声かけで最も適切なのはどれか。

1. 「妊娠悪阻の状態であり、入院して管理したほうがよいと思います」
2. 「妊娠5週目になります。おめでとうございます」
3. 「脱水予防のために、水分をしっかり摂りましょう」
4. 「ビスケットなどいつでも食べられるものを持っておきましょう」

2 その後、Aさんは上司に妊娠していることを報告した。妊娠24週0日(単体)、嘔気も少しずつ落ち着き、パートナーとともに妊婦健康診査を受診した。検診にて以下の情報が得られた。

Aさんのアセスメントに基づく看護師の対応として適切なのはどれか。2つ選べ。

妊娠週数	体重(kg)	血圧(mmHg)	尿蛋白	尿糖	頸管(mm)	FL(mm)
非妊時	53.0					
16週	51.5	120/74	±	-	39	
20週	53.2	118/68	±	-		30
24週	55.0	128/92	-	++	35	40

1. 体重の増加量が著しいため、食事指導を行う。
2. 頭痛や眼窩閃発の有無を確認する。
3. 次の受診は4週間後であることを伝える。
4. 受診前の食事時間と内容を確認する。
5. 切迫早産の徴候があることを伝え、安静指導を行う。

3 Aさんは、妊娠30週0日の妊婦健康診査は自分で病院まで運転してきた。分娩予定前後は、パートナーは長期出張予定である。現在、胎動はよく感じており、経腹超音波で胎児の様子について説明を受けながら笑顔がみられている。最近少し息苦しい感じがあり、「特にがまんできないほどではないけれど、睡眠時に気分が悪くなったことがあり、病気ではないかと心配です」と話す。時折、下腹部の張りを感じ、腰痛もある

という。仕事は現在も行っており、重いものを持つ作業は同僚に依頼することもでき、職場内環境はよい。初産のため、産後は、実家に里帰り予定である。実父母にとっても初孫で楽しみにしているとのことである。乳房タイプⅡa型、扁平入頭、乳頭・乳輪部は固い。完全母乳栄養を希望している。

Aさんに対する保健指導で正しいのはどれか。

1. 「産前休暇は2週間後から取得できます」
2. 「陣痛がきたら、シートベルトをして安全に気をつけて運転してきてください」
3. 「睡眠時に吐き気や冷汗がみられた場合は左側臥位をとり、様子をみましょう」
4. 「扁平乳頭なので、授乳に向け積極的に手入れを行っていきましょう」

次の文を読み4～6の問いに答えよ。

Aさん(42歳、女性)、経産婦。第1子は3歳であり、出生体重3281g、Apgar(アプガー)スコアは1分後8点、5分後9点であった。第1子の分娩所要時間は16時間30分であり、分娩第1期にオキシトシンを使用し、吸引分娩での娩出となった。前回の妊娠では母親学級に参加したが、今回は受講していない。バースプランには陣痛の緩和をしてほしいと書いている。B群溶血連鎖球菌[GBS](-)、羊水インデックス(AFI)18。

妊娠40週3日、7:30に陣痛7分間隔、破水感あり、との電話連絡後、ただちに受診した。

内診所見：頸管開大度3cm、頸管展退度40%、児頭の先進部の高さ(下降度)-3、頸部の硬度 中、子宮口の位置 中央である。卵膜を触れる。BTB 試薬青。胎児心拍数陣痛図(CTG)にて、胎児心拍数基線125bpm、基線細変動10bpm、一過性頻脈2回/20分、一過性徐脈なし。

4 受診時のAさんのアセスメントで正しいのはどれか。

1. 子宮頸管成熟度評価(Bishop<ビショップ>スコア)は7点であり、頸管は成熟している。
2. 前期破水である。
3. 児頭は嵌入している。
4. CTG所見はreassuring fetal status(RFS)を示している。

5 Aさんは入院管理となった。入院1週間前から、前駆陣痛のため熟睡感は得られていない。同時に、第1子が感冒に罹患していたため、保育園を休ませ、看病していた。準備していた入院用の荷物を持ち、夫とともに来院した。最終排便は2日前。陣痛については、「まだ余裕です」と笑顔がみられている。

Aさんに対する看護で適切なのはどれか。

1. 嘔吐が誘発されるので食事は中止とする。

2. グリセリン浣腸を実施する。
3. 呼吸法をいっしょに行う。
4. 足浴を実施する。

6 Aさんは11時20分に子宮口全開大、分娩台にて導尿実施。11時32分、3103gの男児娩出。Apgar（アプガー）スコアは1分後9点、5分後10点、臍帯血ガスpH7.30。11時43分、シュルツェ様式で胎盤娩出。出血量385g。胎盤娩出直後、子宮底臍下3横指、硬度良好。血圧132/86 mmHgであった。清拭し更衣後、母児対面実施。1時間値、体温36.9度、脈拍76/分、血圧108/58 mmHg。子宮底臍下1横指、硬度やや軟。輪状マッサージにて、流血がみられ子宮の硬度はやや硬くなる。出血量88g。後陣痛あり、表情苦痛様。

Aさんに対する看護で適切なのはどれか。

1. トイレ歩行を促す。
2. 後陣痛に対して腹部の温罨法を実施する。
3. 絶飲食とする。
4. 初回授乳を実施する。

次の文を読み7～9の問いに答えよ。

Aさん（33歳）、初産婦。前日22時02分に妊娠37週1日で分娩が終了している。分娩所要時間10時間28分、会陰切開（正中切開）あり。分娩時出血量398g。産褥1日目、10時に看護師が検温のために訪室した。子宮底臍上1横指。硬度良好。悪露の量は、28g/6時間、色は赤色であり、凝血塊がみられる。外陰部の痛みは強く、朝食後に鎮痛薬を使用し、NRS（Numerical Rating Scale）は3。尿意は感じていない。児との対面を心待ちにしている。

7 Aさんの退行性変化のアセスメントで適切なのはどれか。

1. 凝血塊が排出されることは正常である。
2. 子宮復古は正常である。
3. 悪露の色は正常である。
4. 尿意がないことは問題ない。

8 Aさんの乳房タイプはIIa型、乳頭は軟らかく、伸展性もよい。授乳に関しても意欲的である。産褥3日目、徐々に乳房緊満が出現し、熱感も強くなってきている。頻回に授乳を行っており、夜間もほとんど睡眠をとれていない。Aさんの表情には疲労感がみられていたが、「がんばらないといけないから」と授乳室ではほかの褥婦と会話してい

た。自室にて授乳の際「なんで長く吸ってくれないの?口をあまり開いてくれない」と目に涙を浮かべていた。

Aさんの授乳に対する看護師のかかわりで適切なのはどれか。2つ選べ。

1. 夜間は授乳をせず人工乳を勧める。
2. 授乳前に乳頭・乳輪部マッサージを勧める。
3. 「そのうち上手になりますよ」と励ます。
4. 「乳汁産生促進のために、乳房をあたためましょう」と促す。
5. 児のラッチオンのタイミングを指導する。

9 産褥 5 日目。Aさんは退院指導を受け、退院を明日に控えている。「寝不足が続いてつらいけど、おっぱいで育てたいからがんばります。排気がうまくできないときがあるのが、少し心配です」と話す。

Aさんへの声かけで適切なのはどれか。

1. 「じょうずに飲めたときは排気がないこともあるので、心配いりませんよ」
2. 「新生児用の体重計を購入し、授乳量を毎回、計測しましょう」
3. 「排気ができなかったときは、コットに横向きに寝かせるとよいですよ」
4. 「赤ちゃんがよく寝ていたら、5時間までは授乳せずに様子をみてもよいでしょう」

次の文を読み 10～12 の問いに答えよ。

Aさん(40歳、男性)。未婚。就労はしていない。幼少時より人前に出るのが苦手で友人も少なく、両親が不仲という環境もあってか、無口でおとなしかった。クラスでもからかわれることが多く中学時代より不登校となっていた。不安を持ちながらも高校へは進学したが、半年で不登校となり退学した。19歳のとき、アルバイト先の飲食店で、接客中に突然大声を出して「自分ばかり文句を言わる」「道を歩いているだけでも馬鹿にされる」など怒声を上げたため、解雇された。その後自室に閉じこもり「俺のことを馬鹿にする声が聞こえる。恐ろしい」と訴え始め、母親に付き添われ、精神科を受診した。20歳のとき統合失調症と診断され、半年入院した。

退院後は自宅で過ごし通院治療を続けており、ときどき、母親が代理で薬を受け取りに来院していた。自室に引きこもる生活が続くなか、母親への暴力、器物破損などを起こし、入院を繰り返していた。

10 Aさんは1か月前より昼夜が逆転し、食事も不規則となり薬も服用しなくなった。ときどき「俺が悪かった。もう死ぬから許してくれ」など大声を出して何かに聞き入っている様子や、壁を叩いて「どうだ、参ったか。俺に逆らうな」などと言いながら動き回る様子がみられた。心配した母親が病院に相談し、病院からの訪問診療を受け、

入院を勧められたが激しく抵抗したため、医療保護入院となり隔離室に入室した。
入院時のアセスメントとして考えられるのはどれか。

1. 躁状態で気分の高揚がみられる。
2. 急性期の幻覚妄想状態である。
3. 不安状態からの衝撃的な行動である。
4. 発症経過後にみられる残遺状態である。

- 11 入院後 1 週間が経過した。食事は 1/3 程度摂取し、内服は睡眠薬（フルニトラゼパム）のみ服用。その他の薬は「そんなものはいらない」と拒否している。険しい表情で落ち着きがなく、隔離室を小声で何かを言いながら歩き回っており、ドアを強く叩いたり、壁を蹴ったりして「早くここから出せ」と大声で叫んでいる。

A さんへの看護で優先度が高いのはどれか。

1. 薬を飲むと隔離室から出られることを説明する。
2. 薬の副作用の観察を行う。
3. ドアを叩いたり壁を蹴ったりするときは注意する。
4. 落ち着いた態度で話を聴く。

- 12 入院後 3 週間。夜間の睡眠がとれるようになり、声かけにも応じるようになった。食事でも 2/3 程度摂取し、内服薬（リスペリドン）も服用するようになり、表情も険しさがとれてきた。室内を動き回ってはいるが、大声を出すことも少なくなってきた。

内服薬の副作用として最も注意すべき症状はどれか。2 つ選べ。

1. 起立性低血圧（立ちくらみ）
2. 脱毛
3. 悪性症候群
4. プロラクチン上昇に伴う症状
5. 掻痒

次の文を読み 13～15 の問いに答えよ。

A さん（14 歳、女性）は、ファッション雑誌の女性モデルへの憧れからダイエットを始めた。毎日体重計に乗って体重が減っているのを確認するのが楽しみになり、極端な食事制限をするなどダイエットはエスカレートしていった。毎日排便はあるが、緩下薬を多量に服薬していた。次第にやせが目立つようになり、心配した母親が食事を摂るように促すと「まだ太っているのに、こんなに食べるともっと太るから嫌」と言って拒否し、母親と口論することもあった。一方でむちゃ食いした後、トイレで嘔吐することもしばしばあった。A さんは身長 155 cm、体重 47 kg であったが、34 kg まで減少した。ふらつきも目立つ

ようになり、心配した母親とともに精神科を受診し、神経性無食欲症（神経性やせ症）と診断され入院となった。

- 13 入院時の A さんの看護にあたり、最も優先して収集すべき情報はどれか。
1. 嘔気
 2. 血圧
 3. 発熱
 4. 便秘
- 14 A さんは低栄養状態のため、主治医から点滴による補正と病棟内で安静に過ごすように指示が出された。入院後の食事摂取量は 1/4 程度である。A さんは「私は太っている。これ以上食べて太るのが怖い」と訴えた。
看護師の対応で適切なのはどれか。
1. 「体型のことは考えないようにしましょう」
 2. 「太っていませんよ、やせすぎて入院したのですよ」
 3. 「しっかり食べないと退院できませんよ」
 4. 「食事を摂るのがつらいのに努力していますね」
- 15 2 か月後、A さんの栄養状態は改善し、体重も目標値まで増加した。A さんの母親が「退院後、気をつけることはありませんか?」と看護師に相談してきた。
看護師の母親への説明で適切なのはどれか。
1. 「A さんが泣いたり怒ったりしても落ち着いて対応しましょう」
 2. 「A さんの食事摂取量が減ってきたらすぐに受診してください」
 3. 「運動は控えさせてください」
 4. 「ファッションやダイエットに関する情報を制限しましょう」

次の文を読み 16～18 の問いに答えよ。

A さん（54 歳、男性）は、新聞社に勤めている。専業主婦の妻（50 歳）と高校 3 年生の長男、中学 2 年生の次男の 4 人暮らしである。A さんは大学生のころからお酒を飲むのが好きだった。50 歳で政治部のデスクに昇進し、仕事の責任が重くなるにつれ、飲酒量が増えていった。毎日酔いつぶれて帰ってきて、家族にあたることもあった。徐々に二日酔いで遅刻や欠勤をすることが増え、妻は夫の上司に謝罪の電話をするなど後始末をしていた。妻が A さんに飲酒をやめるように促しても聞き入れようとしなかった。

- 16 飲酒を続けた A さんは倦怠感などの体調不良が現れるようになり、妻に再三、懇願さ

れて精神科を受診した。Aさんは診察時「自分は病気ではない、飲みすぎではない。酒をやめようと思えば、いつでもやめられる」と立腹していた。

Aさんの状態はどれか。

1. 反動形成
2. 合理化
3. 同一化
4. 否認

17 Aさんはアルコール依存症と診断された。医師からのアルコールの専門治療が必要であると説明され入院した。

入院時、Aさんに行われる治療で適切なのはどれか。

1. 抗不安薬の与薬
2. 抗酒薬の与薬
3. 作業療法
4. 修正型電気けいれん療法

18 3か月後にAさんは退院することになった。退院を前にAさんの妻は看護師に「退院するのはうれしいのですが、また同じようなことを繰り返すのではないかと不安です。退院後、夫とどうかかわったらよいのでしょうか」と相談してきた。

看護師の妻への対応で適切なのはどれか。

1. 「これまで通りで大丈夫ですよ」
2. 「入院の継続を検討しましょう」
3. 「飲酒しないか厳しく確認してください」
4. 「家族の学習会に参加してみませんか」
5. 「退院後すぐに復職を勧めてください」

次の文を読み19～21の問いに答えよ。

Aさん(62歳、男性)は56歳の妻(主婦、高血圧治療中)と2人暮らしである。子どもはいない。Aさんは会社員として働いていたが、57歳の頃から右上肢の握力の低下がみられ、巧緻動作が困難になった。58歳のときには、両下肢の筋力低下、嚥下障害、構音障害が出現し、専門医を受診し検査の結果、筋委縮性側索硬化症<ALS>の確定診断を受けた。そのとき、今後、病状の進行に伴い、胃瘻増設、人工呼吸療法が必要なことが伝えられた。その後、徐々に病状は進行し、59歳のときには、労作時の呼吸困難があり、勤務を続けることができず、退職した。

現在、食事のとき以外はNPPV(フルフェイスマスク使用)を導入している。食事につ

いては「口から食べたい」という意思が強く、時間はかかるが、妻の介助にて経口摂取している。

要介護3で訪問診療（1回/2週）、訪問看護（4回/週）、訪問介護（3回/週）を受けながら、在宅療養を続けている。

19 ある日、妻から「夫が、目が乾いてお腹が張った感じがすると言うのですが、どうしたらいいでしょうか」と訪問看護師に連絡があった。

1. 「しばらく様子を見てください」
2. 「常備している点眼薬を使用してください」
3. 「腹部マッサージをしてください」
4. 「ヘッドギアの調整をしてください」

20 梅雨の時期になり、大雨の日が続いている。「去年は隣の町で集中豪雨災害があり、避難指示が出ました。自分たちが住む町もそのようなことになったらどうしたらいいのか不安です」と妻が話した。

訪問看護師が指導する内容で優先度が高いのはどれか。

1. 機器取り扱い業者への連絡方法
2. 行政への連絡手段
3. NPPVの外部バッテリーの充電
4. 災害用に持ち出す物品準備

21 Aさんと妻の願いは「できるだけ口から食べて、最後まで自宅で暮らしたい」ということである。病状が進行していくなか、このまま在宅療養を続けるうえで、今後、協働する職種で優先度が高いのはどれか。

1. 管理栄養士
2. 言語聴覚士
3. 精神保健福祉士
4. 保健師

次の文を読み22～24の問いに答えよ。

Aさん（45歳、女性）は、2年前に乳癌の診断（T3N3M0）を受け、右乳房全摘+リンパ節郭清術、化学療法を受けた。6か月前に腰痛が出現し、CT、骨シンチグラフィの結果、腰椎転移が判明した。化学療法を行ったが効果はなく、「娘のそばにいてやりたい」と在宅療養を希望し、訪問診療と訪問看護を利用することになった。現在は、リンパ浮腫、倦怠感、腰痛が増強しており、ADLが低下し、食事、洗面、トイレ移動以外はベッドで過ごし

ている。家事や子どもの世話は、夫や近くに住む両親の手助けが必要である。会社員の夫と、小学生の娘の3人暮らしである。

22 現在のAさんの病期分類はどれか。

1. ステージⅡB
2. ステージⅢA
3. ステージⅢC
4. ステージⅣ

23 訪問時、「痛みが夕方からだんだん強くなって、座って娘と話せないことが増えてつらい」と話す。NRS (Numerical Rating Scale) 6。現在、鎮痛補助薬とオキシコドン塩酸塩徐方剤を1日2回内服している。母親は「麻薬は副作用が心配です」と話している。

訪問看護師の対応で適切なのはどれか。

1. 痛みについて次回の訪問診療の際に伝えるように説明する。
2. オキシコドン塩酸塩速放剤への薬剤変更を医師に相談する。
3. 副作用については、薬剤で予防的に対策できることを説明する。
4. オキシコドン塩酸塩徐方剤は痛みが軽減したら服用しなくてよいと説明する。
5. オキシコドン塩酸塩徐方剤を疼痛増強時に服用できているか確認する。

24 その後も疼痛コントロールが図れず、PCA (患者管理式除痛法) 機能付持続皮下注射が開始となった。

訪問看護師の対応で適切なのはどれか。

1. 穿刺部位の疼痛や発赤がないか観察するよう説明する。
2. PCA ポンプアラームが鳴った場合、訪問看護師に連絡するよう説明する。
3. 追加注入のPCA ボタンを押すタイミングは、医師の指示した時間にするように説明する。
4. 何度でも追加できるので過剰投与に注意するよう説明する。

次の文を読み25～27の問いに答えよ。

Aさん(74歳、男性)。6年前に咳、痰、労作時の呼吸困難があり、かかりつけ医でスパログラムと胸部エックス線撮影を行い、慢性閉塞性肺疾患<COPD>(1期)と診断された。発症当初から、長時間作用性抗コリン薬(LAMA)を処方され、朝・夕1吸行っている。同時に、48年間1日20本吸い続けていたタバコをやめるように指導を受けて、それ以来、タバコは吸っていない。月1回の定期的な受診は忘れず継続している。3年前に妻を癌で失

い、その後、娘（46歳）夫婦と一緒に暮らしており、日常生活は自立している。家事は娘が行っているが、娘は仕事があり、Aさんは日中は1人で、自室でテレビを見ている。

25 3日前から37℃前後の熱と咳・痰が増加し、労作時の呼吸困難が強くなり、かかりつけ医を受診した。検査した結果、胸部エックス線写真には肺炎所見は見られなかった。動脈血ガス分析結果はPaO₂ 62Torr、PaCO₂ 45 Torrであった。Aさんの手指は図のようであった。ニューキノロン系の抗菌薬の投与を受けたのち、当面は安静にして様子を見て、呼吸困難等の症状が強くなるようであればいつでも来院するようにと指導され、自宅に戻った。

受診時のAさんに対するアセスメントで適切なのはどれか。



1. II型呼吸不全を呈している。
2. スプーン状爪が観察される。
3. 咳は乾性咳嗽と考えられる。
4. 抗菌薬の副作用では消化器症状が起こりやすい。

26 その後、半年が経過し、咳・痰はあるものの、室内の生活は自立していた。しかし、ここ3か月ほど、嚥下障害などはみられないが、食欲がなくなり、食事摂取量が半減し、身長168cm、体重53kgとここ1か月で1.5kgの体重減少がみられた。それに伴い、ベッドから離れるのはトイレのみになり、トイレ歩行も速度は遅く、手すりが必要で、入浴は娘の介助が必要になった。要介護認定を受け要介護1と認定され、訪問看護が導入された。訪問看護師が下腿周囲長を「指輪っかテスト」で測ったところ、両手の母子と示指でつくった輪っかの中に、下腿の最も太い部分が収まり、すき間ができていた状態であった。

Aさんに最も考えられるのはどれか。

1. ロコモティブシンドローム
2. サルコペニア
3. 骨粗鬆症
4. 老年うつ

27 Aさんの状態を心配した娘が「父から昔から食が細く、油ものはあまり好きではないのですが、何とか夕飯を工夫してみようと思います。豆腐や納豆なら食べてくれそうなのですが、どんな食事にするかよいですか」と相談があった。

訪問看護師の対応で適切なのはどれか。

1. 「良質な蛋白質を摂るとよいのでお好きな豆腐や納豆を使った料理を工夫してみてください。凍り豆腐なども食べられるようでしたら、栄養価は高いですよ」
2. 「骨がもろくなっていますので、カルシウムを多く摂るとよいでしょう。豆腐や納

豆にはほとんどカルシウムは含まれていません」

3. 「今の A さんには資質を摂ることが大切です。豆腐も揚げ出し豆腐などにして、脂質も摂取できるようにしましょう」
4. 「A さんは高齢ですので、咀嚼をあまりせず食べられる、お粥ややわらかいものを中心につくってあげるとよいと思います」

次の文を読み 28～30 の問いに答えよ。

X 月 Y 日午前 5 時 40 分、A 県沖を震源地とする地震が発生し、B 市、C 市、D 市、E 市で震度 6 強が観測され、4 万 6 千人に避難指示が命令された。震源の規模を示すマグニチュードは 6.7 と推測された。津波の心配はない。C 市で 1 人暮らしの F さん（男性、45 歳、工場勤務）は、7 時からの早出勤務のため 5 時 20 分に起床し、朝食の支度中に立ってられないほどの大きな揺れを感じた。F さんはとっさに横の冷蔵庫の取っ手をつかんだところ冷蔵庫が傾き、さらに食器棚が冷蔵庫に覆い被さってきた。F さんは両下肢を挟まれたまま、身動きがとれない状態で救助を待った。

28 地震発生から 2 時間以上が経過した。大きな揺れはおさまり、C 市の F さんの近隣に住む看護師（31 歳）が避難所に向かう途中、倒壊した家屋から男性のうめき声を耳にした。近寄ってみると F さんを発見し、救急車を要請した。F さんは意識状態に問題はなく、下肢の疼痛を訴えた。

救急隊到着までの看護師の対応で適切なのはどれか。

1. 周囲の人達に救助を依頼し、食器棚・冷蔵庫、がれきの撤去を手伝う。
2. F さんに、何の下敷きになっているのか、どの部位が挟まれているのかを尋ねる。
3. 肌の露出による体温低下を考慮し、衣服などを探しに行く。
4. 救助されるまで、水分は与えられないと説明する。

29 F さんはその後、駆け付けた救急隊により医療機関に搬送された。住民は、いったん揺れがおさまるのを待って、指定の避難所へ移動した。避難所には複数の病院から医師・看護師が派遣された。やがて、死亡 7 人、行方不明 13 人、建物の全壊 25 件、半壊 10 件の被害が報告された。1 か月後 G 避難所では、自宅の全壊・半壊の被害に遭った高齢者を中心に 16 世帯、26 人が生活している。

避難所での看護活動で適切なのはどれか。

1. 慢性疾患を持つ被災者の治療が継続できているか確認する。
2. 被災者同士のつながりを強化するために、集団的アプローチを中心に行う。
3. 避難所で生活の質の向上は望めないため、ライフラインの回復を優先する。
4. 新しい生活に踏み出せるように、積極的な行動をとるように促す。

30 避難所での生活も3か月近くになった。当初G避難所には、自宅の全壊・半壊の被害にあった高齢者が多かったが避難所から仮設住宅、復興住宅へ転居するなど、当初の半数の世帯数になった。しかし、乳幼児や学童期の子どもがいる世帯や親や家族を亡くして途方に暮れている人も残っていた。

この時期の看護師の役割で適切なのはどれか。

1. 子どもの退行現象がみられても、比較的短い期間で元に戻るなので心配ないと励ます。
2. 乳幼児は親の態度や心理状態を察知し、影響を受けやすいことを説明する。
3. 子どもの年齢により悲しみの表現に相違はないことを説明する。
4. 喪失感で途方に暮れている人には話しかけるのを控える。